

令和 4 年 4 月 15 日

(※受付番号 )

教 育 長 様

研究コース
A グループ研究 A
校園コード（代表者校園の市費コード）
561155

代表者 校園名： 大阪市立本田小学校  
 校園長名： 今村 友美  
 電 話： 06-6581-1531  
 事務職員名： 喜連 尋滋  
 申請者 校園名： 大阪市立本田小学校  
 職名・名前： 教諭・佐野陽平  
 電 話： 06-6581-1531

## 令和 4 年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究 A	研究年数	新規研究（1年目）
2	研究テーマ	<b>対話が深まる学びを創出する授業・教材の開発</b>			
3	研究目的	<p>テーマに合致した目的を端的に記載してください。</p> <p>本校では、これまで逆向き設計論、パフォーマンス課題、一枚ポートフォリオ等の研究を実践してきた。しかし、全教員で本校児童の実態を分析したところ、「対話」という点において育成すべき3つの力が明らかになった。</p> <p>「確かな自分の考えをもつ力」「自分の考えを明確に伝える力」「他者の考え方や思いを受け止める力」これらの方をもった「互いを認め合える本田っ子」をめざす子ども像とし、対話が深まる学びに焦点を当て、次の研究を推し進めていく。</p> <p>①対話が深まる学びを実現することで、児童が問題解決に向けて多角的に思考できるようになる。          ②教員の授業力向上 知識・技能に重点を置いた授業から学びの深まりを創出する授業へ転換する。          ③児童に「対話」の必要性や「対話」そのものへの気付きをもたらす教材を開発する。          ④地域の方々、専門家といった他者との「対話」を通して、「対話」に対する思考力を育む。          ⑤実践事例の作成による次年度以降の研究の土台をつくる。</p>			
4	研究内容	<p>継続研究は、前年度の成果と課題を分析した内容を踏まえて記載してください。</p> <p>本研究は、本校の実態から、対話が深まる学びに着目して、児童の育成と教師の授業力向上を推し進めていく。具体的な内容を次に記す。</p> <p>①「対話が深まる」の定義づけと授業実践 仲間との対話、先人を含むさまざまな人との対話、自分自身との対話等、それぞれが深まる状態について定義し、授業実践に取り組む。</p> <p>②「対話が深まる」に着目した公開授業研究会の実施 全市に向けて公開授業研究会を開催し研究成果を発表するとともに、実践交流会を行う。</p> <p>③「対話が深まる」につながる価値のある体験活動の実施 例 6年生 ・弥生文化体験 ・裁判員を経験された方、被爆体験伝承者の招聘など</p> <p>④教員の授業力向上をめざした先進的研究校の視察及び研修会への参加 京都教育大学附属桃山小学校、東京都小金井市立第三小学校、福岡教育大学附属小倉小学校他</p> <p>⑤対話を促進させる学習材・協働学習支援ツールの活用 発表用ホワイトボードや円形型ホワイトボード、大阪市が導入している協働学習支援ツール（SKYMENU Cloud）等を活用した授業実践。また、これらのツールを活用した校内研修の実施。</p> <p>⑥教員の学びを広げ、深めるための講演会の実施 大阪教育大学：錢本三千宏 教授、京都大学：石井英真 准教授、池田市立神田小学校：樋口綾香 教諭 他</p> <p>①～⑥の活動を通して、各授業検討会での記録、各授業記録、各講演会での記録、各ふりかえりなどを整理し、実践事例を作成する。また、それを次年度以降への研究に活かす。</p>			

		<p>日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年間を通して、授業実践の記録の整理、実践事例の作成を実施</li> <li>・ゲストティーチャーについては、授業実践を行うタイミングで随時招聘</li> <li>・毎月 授業力向上に向けた全教員対象の校内研修を実施（対話を促進させる学習材・協働学習支援ツールの活用）</li> </ul> <p>4月 研究テーマ・目的・内容・見込まれる成果等の検討、年間予定計画の作成      5月 指導案フォーマット検討、研究授業日程・授業者の決定（公開研修会を含む）      招聘予定のゲストティーチャー及び講師との打ち合わせ      6月 本研究に対する児童へのアンケート内容検討及びアンケートの作成      大阪教育大学 銭本三千宏 教授による講演      7月 先進的研究校への視察（東京都小金井市立小金井第三小学校）      京都大学 石井英真 准教授による講演      若手教員向け校内研修 講師 樋口綾香 教諭（池田市立神田小学校）      8月 公開授業に向けての教材研究及び指導案の作成      9月 公開授業指導案検討      10～12月 公開授業（コロナ感染状況を鑑みての開催）      公開授業のふりかえり      大学教授等教育関係者による講演や研修会の実施      1月 児童アンケートの実施・分析      先進的研究校での研究会参加（東京学芸大学附属小金井小学校）      2月 先進的研究校での研究会参加      （京都教育大学附属桃山小学校、福岡教育大学附属小倉小学校、国立筑波大学附属小学校）      3月 実践事例集の完成</p>
5	活動計画	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、見込まれる成果を端的に記載し、その成果について、客観的な指標により必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。</p> <p><b>【見込まれる成果1】</b>      対話が深まる学びの実践を通して「確かな自分の考えをもつ力」「自分の考えを明確に伝える力」「他者の考え方や思いを受け止める力」を育成する。</p> <p>『検証方法』      本研究についての児童アンケート「授業中に自分の考えを持てましたか」「自分の考えは友だちに伝わっていると思いますか」の項目について肯定的な回答を80%以上にする。</p>
6	見込まれる成果とその検証方法	<p><b>【見込まれる成果2】</b>      研究授業、校内研修等を通して、教員の資質や指導力を向上させるとともに、研究授業、校内研修等を通して、知識・技能に重点を置いた授業から、学びの深まりを創出する授業へと転換する。</p> <p>『検証方法』      教員のアンケート項目「今年度の研究は自分の授業力向上につながった」「今年度の研究は、自分の教育観の見方・考え方を広げるものであったか」で肯定的割合を80%以上にし、「今年度の研究を通して、どのような力がついたか」「今年度の研究を通して、次年度以降、新たに挑戦したいと思う実践は何か」で具体的に記述する内容を80%以上にする。</p> <p><b>【見込まれる成果3】</b>      地域やゲストティーチャーと連携した活動や、人・自然・文化（もの）との関わりを通した豊かな体験活動が児童の学習意欲を高め、対話が深まる学びにつながるようにする。</p> <p>『検証方法』      本研究の実践前後で、児童アンケートを実施し、「見学をしたり、実物を体験したりする活動は好きですか。」「地域の方々や専門家の話を聞いたり、質問したりする学習は、自分の成長につながっていると思いますか」の項目で、5ポイント以上上昇させる。</p>

6	見込まれる成果とその検証方法	<p>【見込まれる成果4】 本研究が、大阪市各校の研究の一助となる。</p> <p>『検証方法』 公開時のアンケートで「本校の研究は、参考になったか」の項目で肯定的割合を80%以上にする。</p> <p>【見込まれる成果5】</p> <p>『検証方法』</p>				
7	研究成果の共有方法	<p>◆研究発表【必須】 <b>報告書提出日（令和5年2月24日）までに必ず行ってください。</b></p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="441 945 997 1012"><tr><td>日程</td><td>令和 4 年 10 月 21 日</td><td>場所</td><td>大阪市立本田小学校</td></tr></table> <p>◆代表校園HPでの共有【必須】</p> <p>他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p>	日程	令和 4 年 10 月 21 日	場所	大阪市立本田小学校
日程	令和 4 年 10 月 21 日	場所	大阪市立本田小学校			
8	代表校園長のコメント	<p>これまで積み重ねてきた研究内容や児童の実態から、本校がめざす子ども像「互いに認められる本田っ子」を設定した。互いを認め合うために必要な資質・能力とは何かを話し合った結果、キーワードとして挙がってきたのが「対話する力」である。 問題解決の過程や試行錯誤の必要性から生まれる対話、教材と向き合うことで生まれる対話、相手が共感する対話、自分の考えを再確認するための対話等について、理論的な研究と授業実践とをリンクさせながら、「対話が深まる」とはどのような学びが成立することなのかを明らかにしていく。 well-beingな社会を実現させるべき児童にとって、より多くの他者や文化・価値観との「対話」は必要不可欠となる。まずは、本校教員がこの研究を通して「対話する力」を高め、授業力を向上させることで、「一人の人間としてよりよく、より幸せに生きる」というwell-beingな社会を体現させる存在となる。その上で、2030年の社会を形成する児童の育成につながる意義のある研究であると考える。</p>				